第１回　伊勢崎市部活動地域移行検討委員会　議事録

期　日　令和４年１２月２７日（火）１５：００～１６：３０
会　場　伊勢崎市役所　東館５階第４会議室
出席者　菅谷美沙都委員、武井義夫委員、平林知巳委員、小林秀規委員、狩野浩之委員
　　矢島貢委員　　、結城啓之委員、下山祐樹委員

１　開会
２　委嘱状交付
３　あいさつ　（三好教育長）
・部活動の地域移行の本質は、いかにスポーツ・文化芸術を愛好し、幸福な人生を送っていく人をどう育てていくか。
・スポーツ文化芸術を通して、老若男女共に育つ、そして成熟した市民社会をつくっていくことにつながる事業。
・部活動は本来多様な学びの場であり、様々な教育的意義を担ってきた。そうした良さも継承・発展しつつ、スポーツ、文化・芸術振興につながることを踏まえた検討をお願いしたい。
・今後に向けて、理想・課題は大きいが、市全体として一歩一歩できるところから始めてまいりたい。そして、持続可能な改革でありたい。
・スポーツ、文化・芸術を愛好する者にとっての最善の利益となることを目指して取り組んでいきたい。
・クリアしなければならない課題は大きいが、私たちの未来社会を見据えた夢のある事業であると思っている。皆様にはそれぞれの立場で忌憚のないご意見を賜りたい。
４　自己紹介
５　部活動地域移行について　（事務局）
６　意見交換（各委員より）
・学校の現状として、少子化が進んでおり、各部活動への参加人数が減少している。
・合同チームでの大会参加が、競技によっては見られている。
・適正な活動をするためには適正な人数が大切だがバランスが悪くなってきている。
・子供たちの活動の場は確保していきたいが、困難な状況が生じている。
・教員の人数も減少している。部活動数に対して教員の人数が少なく、1つの部活動に複数の顧問を配置できていないのが現状である。
・このような状況の中で、すぐにできることは、隣接する学校や拠点となる学校に部活動の数をまとめ整理することだろう。
・合同部活動を積極的に推進し、子供たちのニーズを確保しながら、学校規模に相応した対応をとり、まずは動かしていく。そのような中で、地域の皆様と連携して、地域が受け皿となる素地をつくっていければと考えている。
・拠点校とはどんな方法がありますか。
・放課後、部活動のある学校に出かけていく方法と、通学区を弾力的にし、部活によって学校を選

べるようにするという２通りがある。
・学校で部活動はやらなくなるのでしょうか。
・まずは、休日の部活動移行の話であって、学校としては急激な変化は大変である。平日は学校の中で部活動をしていくことが良いのではないかと考えている。
・合同部活動の実際の活動状況を教えてほしい。合同部活動の学校の組み合わせは年度によって違ってもよいのでしょうか。
・平日はそれぞれの学校で、休日は合同で行っている。組み合わせについては、年度の状況、3年生の夏以降の引退の状況によって異なってくる。
・平成１５年度から、県中体連では６競技で合同部活動での大会参加が認めれている。あくまでも救済措置という意味での対応である。
・中体連としての課題は、令和５年から全国大会にクラブチームが参入するとスポーツ庁から話があったが、大会参加の条件やスケジュールがまだ未定だということだ。
・伊勢崎の中体連として、大会の在り方についても考えていかなければならない。
・部活動を休日移行した際、子供たちの成果を発表する場について環境整備していかなければならないと考えている。
・そもそも伊勢崎市はなぜ部活動を地域移行するのか、関係する団体、学校、地域、生徒、保護者で共通理解を得られないと難しいのではないだろうか。
・地域のスポーツ環境を整えるためにどうしたらよいかという視点が大切である。
・現場の先生方の意識はどうか、調査やアンケートを実施してはどうだろうか。
・部活動に対して、やる気のある生徒と、そうでない生徒とさまざまである。
・地域で活動するにあたり、協力できる教員はどのくらいいるのか知りたい。
・今後、部活動地域移行がどう進められていくのか、どういう形になっていくのか、現場はまだそこまでの認識はないと思われる。考え方は教職員によってさまざまである。
・クラブを立ち上げるには準備が必要なので、教員、保護者の考え方や方向性を知りたい。
・これまで、岐阜、富山、滋賀など先進的な取組をしている地域を視察してきたが、外部指導者や部活動指導員がいると部活動の移行がスムーズになる。
・地域クラブで中学生を受け入れる考え方や、学校が地域の拠点となる考え方等、さまざまである。
・コロナで全国一斉休校になった時、伊勢崎西部公園に中学生が集まって練習（運動）をしていた。はじめは、生徒それぞれがばらばらに運動していたが、次第にまとまりある練習が行われていた。子供たちは、大人がいなくても、自分たちで考えて運動することができる。
・普段は大人しかいないが、中学生がいると元気をもらえる。
・地域に新しい価値を創り出していきたい。
・地域での運動クラブに所属すると、家庭には金銭面での負担が大きくなる。
・強くなりたいために、所属を変えたり、地域をまたいだりする課題がある。
・これまで大会運営は教員がやってきたが、今後も学校からの協力は得られるのか。
・けがをした時の保証（保険）はどうなるのか気になる。
・クラブの指導者と教員の連携はどのようにしていくのか。保護者はどちらを連絡の窓口にすれば

よいか迷うのではないか。また、進路に関わる部分の窓口はどちらになるのか考えるべき点は多い。

・保護者の中には、学校から部活動がなくなると思っている人がいる。
・境地区は、自校に入りたい部活動がなく、他の地区の学校に行っている子もいる。合同部活動の仕組みができれば、人材の流出を防ぐことができる。
・部活動がなくなることで、放課後に自由な時間ができることを心配している保護者もいる。
・合同部活動の練習は、いろいろな学校の生徒と練習ができるメリットがある。
・地域が学校に支えるために入っていくという考え方が大切であると考える。学校が部活動を手放すわけではない。
・先進的な事例を参考に、地区ごとにできるモデルで進めていく。
・行政区で考え方はさまざまで、話が進まないこともありうる。
・競技によって考え方はさまざまなので、すべての競技で足並みをそろえるのは難しいと思われる。
・現状、やりたい生徒はクラブに通ってやっている。そうではない生徒たちは、部活動があることで、生活リズムを整えることができている。
・二中の水泳部は活動を地域にお願いして、大会参加時だけ教員が引率するという形にしている。地域と連携できるものは協力していきたい。
・協会としては子供たちがどこでも活動できるシステムを作っていければと考えている。
・クラブでは、保険への加入、指導者への謝金等で、保護者の金銭面の負担はある。
・柔道は中学校の大会で審判員としてお手伝いしている。柔道は、部活動地域移行しやすい。協力・連携はできる。
・体操も設備がないとなかなか練習ができず、体操協会が行っている。素地があり発展していければよい。
・休日（地域での活動）と平日（学校での活動）での指導の一貫性が必要だと考える。
・顧問の意識調査、生徒や保護者の望むことを聞いてみてはどうだろうか。
・競技団体としても、教職員の要望や考え方が分かると動きやすい。
・兼職兼業や教員の身分保障が不透明な中で、先生方に聞くのは難しいと思われる。

7　諸連絡

・第 2 回検討委員会の開催について

8　閉会